

はじめに

新指導要領下での日本地理実践が始まった。その地方別学習をどうすすめるか。経験10年以下の教師は、前指導要領下の3都道府県学習しか知らないのでは不安を抱く。経験の長い教師は、各一つの視点から各一つの地方を教えるとされたことにとまどっている。そうした視点別地方学習の展開にひとつの私案を示し示唆を与えたい。そこに本書刊行の第1の意味がある。

たとえば北海道地方では「歴史的背景」を視점에各授業のプリントを配列する。つまり、第1時の概説ではアイヌ語地名や「開拓」の問題を扱い、第2時の農業では米の品種改良のあゆみを稲作北限の前進図から読み取る。続く第3時の工業では、開拓使のシンボル・北辰（北極星）がなぜ現在もビールや酪農会社の商標に使われているか、その謎を探る。第4時では北海道への来遊客の推移を60年代から振り返り、その観光の特性を明らかにしていく。

だが、同時にこのプリントは「他地域との結び付き」という視点からも活用できる。北海道の「開拓」は他地域からの移住から始まったことを導入で押え、上川盆地などでの稲作の発展は十勝の畑作や根釧台地での酪農など他地域と対比して学習させればよい。

また、北海道の工業は地域原料加工型で他地域への移出を柱としているが、それは乳業のあり方を東京近郊の千葉＝他地域と比較させれば理解しやすい。空路が急速に発達して他地域と北海道が短時間で結ばれたことを学べば、それが来道観光客数の激増につながったことが理解できる。

では、同じプリントを「歴史的背景」「他地域との結び付き」双方の視点から活用できるのはなぜか。各地方の産業・生活や文化にはすべて歴史的背景があり、すべて他地域と関わり、すべて自地域の環境と結びついて人口や都市・村落のあり方を規定しているからである。そこで私は、それら7つの視点（傍線部）のいくつかを入れて地方別の授業私案を立体的に構成した。

読者は、自分の視点から「地域の特色ある事象や事柄を中核として、それを他の事象と有機的に関連付けて」（指導要領）本書第3章の各案を再構成し、あるいはプリントの内容を差し替え、めざす授業を具現化してほしい。

第二に本書では、第1章・第2章を中心に切実性のある今日的教材の授業化を図った。たとえば東日本大震災と原発事故については、内陸の建物の屋上に運ばれた遊覧船の写真にまさかと思う仕掛けで出合わせ、津波襲来状況をペアで読み取り班でのウェビング・被災者の思いの読み取りにつなげる。

次いで次時では白雪姫の漫画の謎解きから原発クイズ・地図作業につなげ、立地の特色を視覚化して考察にすすんでいく。

尖閣諸島問題、普天間基地撤去問題なども南極との対比や沖縄からの視点で教材化したので、その後の状況の進展にあわせて使える部分は使っていただき、よりよい授業づくりの契機としてほしい。

第三に本書では、プリントだけでなくさらに具体的な授業展開のヒントがほしいとの声に応え、第3章を中心に私の板書案をところどころ挿入した。板面の左から右へ、何を略し何を強調し図と文をどう組合わせてポイントをまとめていくか。その技法を批判的に摂取していただければ、読者の授業力向上に少しはお役に立てるのではないだろうか。

私が本書の旧版・『日本地理授業プリント』を出版したのは、3都道府県地理学習の開始を翌年にひかえた2001年6月のことであった。7地方別学習を廃止した中で、何をどう構成すれば生徒の認識を深め日本全体へ広げることができるのか。それが当時の私の課題であった。

それから11年を経て、現代にふさわしい日本地理学習の私案を新学習指導要領に対応して提起できることは心より嬉しい。多忙な学校現場に身を置きながら、こころよく執筆に協力してくださった向井一雄・原山隆章・宮城右・宇栄原健夫の4氏に深い感謝をささげ、はじめのことばとしたい。

加藤 好一